

大阪 動意材料乏しく概ね様子見推移

25日から岸和田製鋼がドライ粉類値下げ

(大阪) 大阪地区の鉄スクラップ市況は概ね様子見状態。一部でドライ粉類の値下げも聞かれるが、上級を中心に入荷促進に向けた裏値対応もつづいており、8月もさほど需要が落ち込みにくい点で目先に大きな値動きを予測する声は乏しいようだ。同地区電炉のH2実勢値は3万3500～3万4500円、新断バラ同3万8500～3万9000円、鋼ドライ粉バラ同3万1500～3万2500円見当で推移。

地区内では中山鋼業が炉休に伴って、長期荷止めを行っているほか、大阪製鉄もH2～L1の荷止めを実施しており、この販路縮小が品種によっては他社の入荷押し上げに寄与し、25日から岸和田製鋼がドライ粉バラ500円、ドライ粉プレス1,000円の値下げへと踏み切った。これに反応する動きは見られないが、炉休だけでなく、品質懸念も加わって、下級ヘビーの需要不振はいまだ付き纏う展開にあるなかで、先週末に韓国・

現代製鉄が商談を見送ったように、H2単体はどちらかといえば需要国側の買い意欲の足並みは揃っておらず、全体的に見ても日本の割高感は強まっているため、「海外市場に押され、下級は高値調整という可能性は排除できない」(電炉購買担当者)と指摘する。

一方、上級品種は先週にも一部で裏値加算が行われ、H2以下についても短期的に実勢以上を提示しての引き合いは残っており、限定ながらも水面下での積極対応がつづいている。電炉筋全体に安定した入荷を保っているものの、それでも荷止めや制限下で当初想定していたほどの入荷レベルには達しておらず、今のところ市況の方向性も乏しい展開だけに、「市況を突き動かす確固たる材料が見当たらない以上、まだしばらくはこのままの状態が維持されるのでは」(ヤード業者筋)と見る向きが多い。

山陽特殊製鋼、7月27日(金)12時～8月4日(土)9時まで全品種荷止め

(姫路) 山陽特殊製鋼は夏季工事のため、7月27日(金)12時～8月4日(土)9時まで全品種荷止めする。工場閉

始時間は8月4日(土)7時より。荷受け開始時間は8月4日(土)9時

近畿工業 太陽光パネル処理設備を営業販売

すでに金属リサイクル業界から問い合わせや見学依頼も

(兵庫) 破碎機・選別機メーカーの近畿工業(本社=兵庫県神戸市中央区、和田直哉社長)はかねてより開発をすすめてきた太陽光パネルのリサイクル処理設備が完成し、金属リサイクル業界含め廃棄物処理業界に営業販売を強化していく。

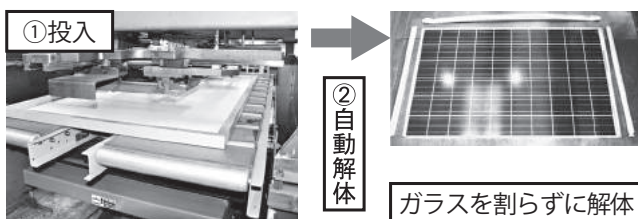
2012年に固定価格買取制度(FIT)が開始して以降、急速に普及した太陽光パネルの耐用年数は20～30年と見られ、2040年には年間80万トンの大量廃棄が予測されている。こうした将来像を予測して、2016年3月には太陽光パネルのリサイクル事業に向け、市川環境エンジニアリング、リサイクルテック・ジャパン、ネクストエネルギー・アンド・リソース、近畿工業による4社合弁のオールソーリューションを設立。太陽光パネルの枠部分はアルミが用いられ、リサイクルが可能だが、パネルにはガラスや微量の銀といった有価物だけでなく、鉛やセレンなどの有害物質も含まれるため、ガラスと接着されている貴金属を含むシート部分を分

離できれば、銀の回収によってコストを賄えるだけでなく、最終処分場行きを減らせるなど、適正リサイクルに欠かせないものとして、破碎・選別技術に定評の高い同社が剥離技術の向上をすすめてきた。

近畿工業が開発した太陽光パネル処理設備の主な流れは端子ボックスを取り外した後、アルミ枠解体機へ投入。センサーがアルミ枠の位置を感知し、1枚当たり120秒のペースで自動でアルミ枠のみが分離される。つづいて、アルミ枠を外したパネルはガラス剥離機へと投入され、自動的にロール状の刃物で剥離することで、85%以上のガラス剥離が可能となる。設備全体の処理能力は1日当たり8時間、1枚20kgと仮定すれば、1日約4.8トンを処理できる計算だ。

将来的な発生増と事業強化へ向けて新たにリサイクル分野の拡充を図ろうとする金属リサイクル業界からの処理設備に関する問い合わせや見学依頼もすでに相次いでいるようだ。

■アルミ枠解体機



■ガラス剥離機

